

ルネサンス研究の動向に関する一考察

柴 山 英 一

一 ブルックハルト的伝統

周知の如く、ジョルジオ・ヴァザリ Giorgio Vasari 以来、ルネサンス觀に関する賛否両論の、分水嶺ともいへべきバーゼルのヤコブ・ブルックハルト Jacob Burckhardt は、一八六〇年に著した例の Die Kultur der Renaissance in Italien の中で、ルネサンスの古代的性格に就いて印象的な回答を与えているが、而も彼とても一応はルネサンス文化發生の前提としての中世をも、考慮に入れているようである。尚又偶然にも、その前年にはフォイクト Voigt が、古典的古代の再生に関する傑作 Die Wiederkehrung des Klassischen Altertums をものしているが、この兩著作に依つて古代復活論の重要性を増大したことは、否定できない所である^①。

扱てブルックハルト的伝統の継承者の一人であるサイモンズ Simonis は、一八七五年—一八六年に亘つて、例の Renaissance in Italy, 7 vols を著し、その中で豊富な実例を以つて、「ルネサンスは近代文明の母であり、イタリア人は寧ろ中世を跳び越えて、再び自らを

古代世界に結びつけようとの試みに、成功したのである云々^②と述べているし、又アダムス Adams は当時極めて有益な著作として知られていた Civilization during the Middle Ages, 1894 の中で、事実上ブルックハルトの見解を分り易く解説して、「人々をして、自己の能力に就いての自覚を呼び起させて自信を与えること、又自然の美と生活の喜びを教え、過去と現代との關係、及び、人間の創造力の偉大さを人々に感得させることがルネサンスの任務であつた。かくして人々は彼等の背後に、極めて意味深い歴史が横つてゐることを認識し始めたのであつて、ここに至つて所謂ルネサンスと呼ぶ所の、知的な科学的なヨーロッパの変質が始まつたのである云々^③」と論じているのである。

更にその後四〇年以上経過して、一九三六年にはリード Reid が、これ又有益な著作である The Tudors の中で、ブルックハルト派の概念に就いて、次のように入念に観察してゐるのである。即ち「ルネサンスとは人間が、その環境に適応するように、自由に心構えを

新たにすることであり、中世的な概念に置き換えられた概念であつて、端的に言えば、それは近代世界を全体として動かす衝動であつた。かくして人々はギリシア及びローマ人自体を、無条件に尊敬したのではなくて、寧ろギリシア、ローマ人が自ら努力して、極めて満足するに足る実績を古典の中に打ち建てた故に、ルネサンス人は古代のモデルに注目し、更により多くのインスピレーションと指導を享けようとして古典に依存し、専らイタリアに着眼したのである云々^④と。尚又一九三八年にはブルックハルト派の美術史家であるイッサー Mather が論説 *The Spirit of the Renaissance* の中で、次のように解説しているのである。「ルネサンスの開拓者達の天才と洞察力は、古代ギリシア人やローマ人が他の地域の人々に増して、より以上自然と人性に就いて、有効で確かな知識を有していた点を理解したのであつて、それ故にこそ又、ルネサンス期の人々も古典を発見復活させ、又古代の大理石の彫刻等を研究するに當つて、最もよく踏み馴らされた道を通つたのである云々」^⑤と論じているのである。更に一九四四年にスペインの歴史家メリマン Meriman は、その著 *Suleiman the Magnificent* の中で、次のようにブルックハルトに讃辭を呈しているのである。即ち同著の開巻劈頭に「一六世紀前半期程、魅力ある時代は歴史上殆んど無かつたと称してよい。この頃、全西歐にルネサンスの精神が効果を収めて、人心に絶えず、より大きな活

動力を自醒めしめつつあつた。かくしてイタリアは忽ちの中に知的な案内者となり、又より野蠻で強力な勢力の政治的餌食となり果つたのであつて、ルネサンスの精神とは、とりわけ個人主義的なものであつた云々」と。而も実はブルックハルトに対する最も徹底した讃辭は、例のイギリスの博識な著者であるゲーチ Goehy に依つて、述べられているのである。即ち「ブルックハルト程のエネルギーな洞察力を以つて、或る時代の心理を解釈した歴史家は、恐らく一人も無かつたと思われる。彼の断言する所に依れば、中世期に在つては人々は、一階級なり一自治体又は或る家族の一員であつたし、社会は教会政治の元に置かれ、伝統が無上のものであつたが、ルネサンスに至つて人間は自己を発見して、精神的な個人となつたのである。一千年の束縛が打破せられ、自己実現が目標となり、世界と人間に関する新たな自己判断が、流行し始めたのである。フリードリヒ大王のような目の眩む人物は、中世期には只一、二回見られたに過ぎなかつたが、今や万能の人 (*Hommo universale*) が行動の世界や思想及び芸術界に於いても、一般的な事実となり、就中一五世紀は多方面の才能を有する人間の世紀であつた。而して、これ等の驚歎すべき人間植物が成長した土壌は、緊張した都市國家の生活や、古代の芸術・哲学の復活或いは權威の弱体化、クリスト教信仰の崩壊等、多くの成分から構成せられていたのである。又ルネサンスの

専制君主や傭兵隊長は、無情残忍ではあつたが、人々を巨大な鑄型に投げ入れる政治的芸術家であつた。かくしてルネサンスは凡ゆる明白な弱点を懐いたまま、近代世界の春の季節を迎えたのである云々」と強調してゐるのである。^④

尚美はこのブルックハルトの伝統を継ぐ人々、或いは又次項で述べる反ブルックハルト派の系譜に属する人々の中にも、それ等の所論が例えれば必しも古代再生論なり中世継続論一辺倒ではなく、ワイゼ Weise 等は結局はブルックハルトの衣鉢を継いでゐるものの例の *Der doppelte Begriff der Renaissance*, 1933 の中で、ブルックハルト派に対しても鋭い批判の矢を向けしており、又逆にマルチン Martin は周知の如く *Sociologie der Renaissance*, 1932 の中で、反ブルックハルト的な中世継続論を展開してゐるが、イタリア特にフィレンツェを重視した点では、ブルックハルトと同一見解に立つてゐるようである。

- ① この点に就くことは *Historische Zeitschrift*, XCVIII: 30-54
- ② 中のケッツ Greiz 及び *Deutsche Rundschau*, CXXXIV: 416-30 のフランク、Brandi 所論参照。
- ③ マンロー Munro 及びシーリー Selley 共著 *Medieval Civilization*, p. 524 参照。

④ Adams, *Civilization during the Middle Ages*, pp. 356-64 尚同著、ルネサンスの章の凡てが、事実上ブルックハルトの平易

な解説に宛てられてゐる。

- ④ Read, *The Tudors*, pp. 46-47
- ⑤ *Historical Aspects of the Fine Arts*, pp. 45-46
- ⑥ Cooh, *History and Historians in the Nineteenth Century*, 1913, pp. 581-82

二 反ブルックハルト派の系譜

同じく中世尊重論者の中でも、その見解が所謂大同小異で、部分的には異つてゐる点のあるのは止むを得ないが、ルネサンスに関するブルックハルト及びフォイクト理論に対する反対論の第一は、ルネサンスの教ある特徴、例えば個人主義・自然愛・現世主義等は、中世の領域に於いても見出され得るとの主張であり、第二は中世の特徴、例えば權威に対する服従・超自然主義及び超人間的なものに対する関心等は、ルネサンス期にも見られる一般的な現象であつたとの二点である。而して、このようなブルックハルト派に対する批判は、文芸復興期の革命的な (Revolutionary) 性格よりも、発展的な (Evolutionary) 性格の線を強調するものであり、更に又中世に関するブルックハルトの知識なり理解は、不完全且つ変化のない、暗い色彩のものであつたとするのである。尚ルネサンス文化の連続性を肯定して、フーガソン Ferguson が「客観的な妥当性を余り失わない範圍で、二つの原理的なものに要約すると、第一は結局ルネサンス・イタリア文化中、賞讃に価するものは、寧ろ、それが独創的

なものでなかつたことと、第二は独創的なものは概して貧弱で、儂めなものであつた云々と、皮肉な逆説的論評を加えているのである。^①

扱て一八八五年には、例の反ブルックハルト派の急先鋒の一人であるトーデ Thode が周知の如く、聖フランシスに関する魅力的で且つ劃期的研究である所の Franz von Assisi und die Anfänge der Kunst der Renaissance in Italien を著し、その中で愛すべき聖フランシスが既に事實上、イタリヤ・ルネサンスの芸術的な偉業にインスピレーションを与えたこと、而も一方古典的古代の芸術は単に形式上、或いは技術上の助けになつたに過ぎなかつたと力説して、古代を軽視しているのである。而もこのようなトーデの攻撃を丹念に押し進めたのが、例のノイマン Neumann であつて、彼は論文 Byzantinische Kultur und Renaissance Kultur, 1903 等の中で、所謂ブルックハルト派の建造物の主な支柱を破壊し始めたのである。即ち彼は古代的なものが強く支配していた所の、ビザンチン帝国の停滞した文化を、西欧の進歩的な文化と比較して、真に近代的な個性を芽生えさせた原因は古代の復活ではなくて、寧ろ中世クリスト教信仰や現実主義的なゲルマンの野蛮人達であつたとの、結論に達しているのである。

更に、より徹底的な破壊はノルドストレーム Nordstrom が、一

九三三年に著した小論著 *Modern Age et Renaissance* ^② の中での、国民主義者の見解に立つ活発な攻撃であつて、その中で彼は、中世フランス文化が新たなヨーロッパ・ルネサンスの根源であり、後期イタリヤ文化は何等意味ある要素を附加しなかつた点を、次のように指摘するのである。即ち略一四〇〇年までの中世文化關係の諸業績をイタリヤ・ルネサンス期のそれ等と比較して、例えば中世期の西欧は既にフランスの指導下に在つて、一般にルネサンス・イタリヤの成果と考えられている業績―勿論それ等の中には古典的な學問の復活をも含めて―に先鞭をつけていたこと、又イタリヤは特にフランスに負う所が極めて大であつたこと、要するにルネサンスは中世から發展したものであると断言、更に彼は語を継いで、中世の研究が進むに連れて、今日まで現代文明の基盤を、イタリヤ・ルネサンスの中に見出していた伝統的な思考を、完全に修正しなければならぬことは明白であること、又我々が今日までルネサンスの西欧文化への一大貢獻として、考えるように教へて來た所のものは、実はその主要な点は中世的伝統の継続であるか、或いは異教的イタリヤの影響で變化を來したと思われること、而もこのような事実なり伝統は、一〇世紀から一二世紀に亘る數世紀の間に、主としてアルプス以北で―特にフランスが謂わば最も輝かしい熟練工であつたのであるが―殆んど全西欧を含む文明圏の中に於いて形成せられたこ

と、従つてイタリアが文明の民族的な指導者として、比較的緩慢に登場して来る以前に、ヨーロッパ・ルネサンスのことを語る事が出来るのであつて、それは複雑多様な且つ、より高度の近代文明を、その上に組み立てることが出来る程、堅牢なものであつた点等を強調しているのである。^①

而も、このようなフランスに重心を置くノルドストレームのブルックハルト派に対する攻撃は、学界の注目を浴びたものの、確かに余り誇張された嫌いがあり、従つて特にイタリアの古典学者達は強く拒否しているのである。例えばシチリアーノ Scialino は一九三六年にイタリア語の小著 *Medio Evo e Rinascimento* の中で、大いにノルドストレームを反駁しているのである。即ち彼は時としては寧ろ輕蔑の色さへ浮べて、ノルドストレームの見解を全面的に否定し、次に述べるように一種皮肉な位、徹底した主張を以つて、彼自身の分析を終るのである。即ち「結局凡ゆる観点から見ても、イタリアのルネサンスがイタリアから始まつて、世界を風靡した理由とか、或いは又古代ギリシア・ローマの文明が、近代のためのものである理由を知るのに、何も占星家の手を煩わすこともあるまい云々」とか、更に又少し異つた言い廻しで「中世期には、一つの精神と一つの普遍的な文化が、凡ゆる民族を育んだのであるが、文芸復興期になつて全世界を指導したのは、選り抜きの一民族の力である

云々」^②と力説し、謂わばシチリアーノは改良せられた新たな武器で、ブルックハルト派の主題を弁護しているのである。而もイタリア以外の中世主義者達は大体、ノルドストレームの論説を極端ではあるが、正に眞実の核心を含む極めて有益な解釈であると見做したのであつて、特にフランスの若干の国民主義者達に依つて、全面的に支持容認せられているのである。例えばジャック・ブーレンジエール Jacques Boulesteix の如きは、大略次のように繰返し強調している。即ち「結局国民的感情の再生・知的好奇心・古代科学・古典的ラテン語使用の復活・その他要するに凡て近代ヨーロッパ文化の端緒は、一五世紀イタリアではなく、正しく一二世紀頃のフランスであつた云々」と。

尚実はブルックハルト派の合言葉である所の、古代の復活とか個人主義或いは人間と自然の発見等は、謂わば個性なり獨自性を欠いているのである。というのは例えれば一二世紀のフランスには、既に一種の古典の復活があつたと言われており、而も、この一二世紀がどのような方法で古代を理解したかが問題であらうし、更に又勿論中世期には例えば残忍な貴族・僧侶・國王・法王等の何れを問はず、個人主義の点では少しも欠くる所がなかつたのであるが、而もルネサンスのイタリア人の個人主義は、如何に中世期のそれと深刻に異つているかを、一応考慮する必要があるかと思われるのである。

更にシチリアーノの解説に依れば、イタリヤに起つた中世期から文艺复兴期への推移の標識になるのは、夢幻的感動的な中世の想像力を、芸術的で且つ知的な洞察力と精巧さに取り替えた所の、知的又は古典的能力の登場であると論するのであるが、然らばそのような能力とは如何なるものであるか、又それは何処から如何にして生ずるのであるかという問いに対しては、シチリアーノは遺憾乍ら次のように、極めて不完全な解答しか与えていないのである。即ち「イタリヤ人の通有性として、常に一種生々とした古典的な伝統と素質があり、更にイタリヤでは種民が他の地域に於けるより、より順調に成育するのが常であつた云々」と論するのであるが、恐らくこのような天賦の才には、自然の影響もあつたであらうし、更にイタリヤの政治的社会的動向も亦、寄与する所があつたであらうが、而もこのような能力の解放を助けたのは、コムーネの人民大衆の反封建制度運動の成功の故ではなくて、寧ろ或る意味では反対に科学なり学問的な原理を、俗衆の支配から切り離したためであり、或いは又国王・法王・専制君主・人文主義者達の力であつたと考えられるのである。^⑩

扱て実は精神的には寧ろ、アリストクラットであつたルネサンスのイタリヤ人は、必ずしも徒らに中世を拒否したのではなくて、例えば聖トーマスのようなクリスト教父・その他の学者・アラビヤ人・

ユダヤ人等の中の、価値あるものに就いて種々究明したのであるが、満足な成果を得られなかつたので、結局ルネサンスの創造者達は偉大な異教的古代に依存して、例のポッカチオも言うように、各種の自由研究が再び採り上げられ、研究熱が広まつて、次第に民衆の心を捉えるようになり、かくしてルネサンスが個人を教化し、個人の精神的な欲求を充たし、中世人とは余程異つた人間を形成するようになったのである。^⑪ 而も、このルネサンスの新しい人間は勿論古物をも蒐集し、又名声・学問・教養を追求して止まないものであるが、シチリアーノの言明に依ると次の如く「イタリヤ・ルネサンスの精神とは、研究や批判に対する情熱であり、新たな発明や発見であるとか、よりよいものに対して心を奪われること、更に人格を豊かにして審美眼を磨く綜合力であり、中世期は以上のことを欠いていたのであるが、イタリヤのエキスパート達が、これ等を世界に伝播するに至つたのである云々」と結論づけており、結局先きに述べた反ブルックハルト派のノルドストレームと、ブルックハルト派のシチリアーノとの間の見解の相違は、やはり百パーセントの不一致ではなくて、極めて控え目の程度ではあるが、両者の間に類似点を見出すことも可能であると、思われるのである。

更に反ブルックハルト派の一人であるヤコブ Jacob は History, N. S. 1831-32の中に、大略次のような意味のことを述べているの

である。即ち「ルネサンス研究の拡大で、もはや我々は個別的閉鎖的な文芸復興期というような、古い確信を以つてしては立論出来ないし、又価値の漸進的変化を探究すること、更に制度上の過去が突然捨てられたのではなくて、徐々に新たな組織に向つて進み、やがて新機構の誕生さえ見るに至つたプロセスを、究明しなければならぬ云々」と。而も同じく Hison の同巻に、ターバーヴィル *Terrevalle* は次のように、ヤコブとは異つた見解を記して、婉曲にブルックハルト派を支持しているのである。即ち「今日まで、広く一般に認められている伝統的なルネサンス観は、相当の修正を要するとしても、主要な点は批判攻撃によく耐え得るものであり、結局本質的には元のままであることを、今尚信じて疑わない云々」と主張しているのである。

尚又反ブルックハルト派の人物で、スペインの出であるアメリカの哲学者サンタヤナ *Santayana* は、一九三一年に出した論著 *Genetic Tradition at Bay* の中で、「ルネサンスとは単に、中世期に飾り立てた凡ゆるものの、継続に過ぎない云々」⁽¹⁾と一言しているし、同じく反ブルックハルト派の一人であるハーヴァード大学のホワイトヘッド *Whitehead* は、一九四二年に新たな大規模の進歩の機会に就いて執筆し、その中でルネサンスという時期を拒否して、「私がルネサンスを除外したのは、イタリア・ルネサンスは単に、幸運な少

数者に關係があつたに過ぎないからであり、それは中世最後の力走であつた云々」⁽²⁾と主張しているのである。又同じく反ブルックハルト派のテイラー *Taylor* は、嘗て一九一四年に論著 *Medieval Mind* の中で、人々の耳にいつまでも余韻を留めるような、慎重な見解を発表しているのである。即ち「嚴肅な歴史家の役割は一時期、例えば文芸復興期とかカロリಂಗ王朝又は、第二二世紀とか或いは特定のイタリア人というようなものを、追放することであり、そのためには歴史的連続の概念を以つて、置き換えねばならない云々」と、更に彼は語を継いで、「ルネサンスという名辭は、六、七〇年前のイタリアでは、例の一五世紀 (*Quattrocento*) その他の文化に、適用せられたかと思われるのであつて、而もそれは人々を誤つた考えに追いやるものである云々」と論じて、複雑多様なルネサンス概念の理解の困難さを、指摘しているのである。尚又このような点に就いては、ホワイトヘッドも一九三三年に出版した *Adventures of Ideas* の中で、問題の核心に觸れて「事實上、問題に依つては明確に理解批判の可能なものと、又寧ろ未決定な見解が有効適切であるような論題との間の相違があり、而もこのような区別の端緒が結局、近代精神なり近代的知性の曙光となり、批判を導き出す所以を考慮に入れねばならない云々」⁽³⁾と論じているし、又ディルタイ *Dilthey* も例の *Gesammelte Schriften*, 1921-85 の中で、「理性の主権時代を促

進したのは結局、手先きの労働と研究精神との結合であつた云々⁽¹⁴⁾と確信しており、更に又ドイツの教会史家として著名なヘフェーレ Hefele 氏が、一九一九年の Historisches Jahrbuch ⁽¹⁵⁾の中で、イタリ
ア・ルネサンスの凡ゆる成果の根源を結局、フレデリック赤髯帝が
一一七六年にロンバルディア同盟軍に撃破せられた後、自治都市に
起つた自由と愛国心の故であるとしているのである。

尚実は現世主義の發達として、この世の出来事に一層注目するこ
とは、或る意味では勿論許さるべきものと、考えられるのであるが、
このような点に就いて例えばフランスのブレッヒエー Brehier 氏は、
一九二七年の Histoire de la philosophie の中で、「文芸復興期には
冥想的で且つ純理論的な人々は結局、實際家例えば職業芸術家や各
種の技術家達に、舞台の中心を譲らねばならなかつたのであつて、
而も寧ろ宗教界を除けば事實上、如何なる時代にも祖照家達が舞台
の中心を占めたか否か、恐らくは疑問であらう云々⁽¹⁶⁾」と述べている
のである。

以上のように古代への関心の復活とか、古代に関する知識の増大
が、現代の性格を誘導したのであるとする所の、ブルックハルト及び
フォイクト理論の放棄に依つて、寧ろルネサンス文明の眞の原因と
して、中世以来のより現実的で意味深いもの、例えば生命力・希望・全
西欧のエネルギーシユな人達の活動力が、ルネサンスの本質的な要

素として考えられて来るのである。このような点を更に具体的に述
べるならば、既に習慣づけられてしまつてゐる古代からの、凡ての
遺産をも含めて、西欧の自治都市や諸首都に於ける生活機構は、芸
術・文學的裝飾・哲学・歴史を以つて集成せられてゐること、又他
の文明なり地域との接触を含む商工業的な企業の大膨脹、或いは
又例のマルコ・ポーロからディアスやコロンブスに至る、地理的知
識や航海技術の發達とか、更には印刷術・顯微鏡・望遠鏡・大砲等
の發明・或いは太陽中心の宇宙觀の証明、尚又マルシリオ・ダ・パ
ドアの法王万能に対する挑戦―それは事實上、凡ゆる至上権に対す
る挑戦を意味し、例のコンスタンヌスやバーゼルの宗教會議で採り上
げられてゐるのであるが―に依つて明示せられた所の、政治的權威
の性格に関する探究、最後に凡ゆる學問活動に於ける、俗人階級の
参加貢獻の増大が、寧ろ眞のルネサンスを形成する主たる要素であ
る。而も肝要な点は、ルネサンスが以上の諸現象を引き起したので
はなく、寧ろこれ等の諸現象がルネサンスを形成した点であつて、
少くとも兩者の間の相互作用が考えられるのである。実はこの点に
就いても従来多くの學者達が、このようなエネルギーなり迫力の由
來を説明しようとして試みて、例えば八一―九世紀の頃、西欧海岸を侵略
した北歐人即ちヴィキングスや、アラビア人の一派のこと等が、今
尚時として話題に上るのである。

扱てルネサンスとは勿論イタリアをも含めて、ヨーロッパ各方面のより進歩した人々の業績であり、而もこの点に就いてブルックハルト派のシチリアーノが、イタリアはルネサンス初期に於いては、著名な人物の数及び重要性の点で、西欧の他の地域を遙かに凌駕したことを指摘しているのは、一応正しい主張であると言ひ得るのである。例えば当時、科学活動の中心であつたパドヴァ大学はブルブスの彼方から、コベルニクスやヴェザリウス及びハーヴェー等を招聘したのであるが、彼等自身少くともイタリアに寄与したと同様に又寧ろ、得た所も多かつたと言ひ得るのである。而もルネサンス初期の頃、イタリアが他の地域より優れていたにしても、そのような優位は正に不安定なものであり、如上の三人を始め、デカルト・ケプラー・ガリレイ・ニュートン・モンテーニュ・シエクスピア・ベークン・グロチウス等の中で、果して幾人が差引き勘定で、イタリアに借りがあると言ひ得るか、甚だ疑わしいのである。況んや当代イタリアは専制君主やスペインの支配に依つて、打ちひしがれていた実情に於いておやである。

尚実はルネサンスが假りに、近代到来の先触れをなさなかつたとしても、古代の幅広さ・豊富さ・貴重さに就いて、少くとも中世期よりは、より明快な概念を以つて近代を豊かなもの、肥沃なものにしたと言ひ得るのである。又勿論中世期とても、反ブルックハルト

派のテイラーの *The Medieval Mind* 中の言葉を借りて言えば、所謂古典的伝統 (Classical tradition) に多大の恩恵を蒙つてゐるのである。尚近代の肥沃化作用は例えば次の時期に、各地域で結実し始めたのである。即ちイタリアでは、アルベルティ Alberti やダロレンツォ Lorenzo di Magnifico 等が、ラテン語こそイタリアの文語であるとした従前のドグマを拒否して、トスカナ体のイタリア語で書き始めた時、或いは又一六世紀初頭にトマス・モアや北人の人文主義者達が、母国語で記し始めた時に、近代の豊富化が始まつたのである。而もこれ等の人文主義者達が着手し始めた進歩は、その後クリスト教会に対する反抗や、宗教戦争の勃発、それに続く抑圧等に依つて甚しく阻止せられたのであつて、そのような状態が結局一六四八年の三〇年戦争の終りまで、続行したと見做され得るのである。更にその後周知の如く、英・仏・独殊に北方では古典に関する学識の前進が再開せられ、それは確かに高く評価されるべきものを含んでいるのである。

シーリー Selley は、その論著 *The Renaissance—its nature and origins*, 1950 の中で、ルネサンスの性格を述べ、「ルネサンスは文芸復興と、その随伴物で区分せられる所の一種の Revolution ではなくて、寧ろ一般的に言へば現代の世界にも同じ迫力で作用を及ぼしている。一種の Evolution であつたとする觀察が、自ら生ずると思

②と強調し、更に次のように希望し且つ結論するのである。即ち「ルネサンスの課題は必ずしも解決できないものと見做さるべきではない。勿論それは教理的な解決を得ることの、不可能な概念の問題である。而も一八六〇年以來、所謂イタリア・ルネサンスなり、それに随伴して起つた現象で且つ、ヨーロッパ・ルネサンスにとつて意味深いものと考えられる各個人・諸動向・諸業績、特にこれまで全く顧みられなかつたり、軽視されて來た若干の重要な個人や諸運動等に就いて、公平な解明評価がなされねばならない。それ故にルネサンス期の、又必要に応じて因襲的な限界なり領域を拡大して、政治・経済・文学・歴史・哲学・言語学・美術を始め、科学の發達に伴う發明・發見等の諸要素を十分考慮に入れ、実証的な結論を引出すことが試みらるべきであり、かくして願くは現代を下から支えているルネサンスという過去を、理解しようと熱望する学徒達の混迷を打開したいと思ふ云々」と。而もルネサンスの実体の解明は例のマルチン等と共に、歴史家の具体的なルネサンスの社会経済史の中から、その意義を導き出さねばならないことを痛感する次第である。

次に慎重なルネサンス改訂論者であるフアーガソンは、例の最初の綜合的ルネサンス解釈史ともいへる *The Renaissance in Historical Thought, 1948* の序言に、過去五世紀間のルネサンス解釈の動

向に就いて、大略次のように述べているのである。即ち「過去救世紀間に亘つて、ルネサンスの性格・根源・眼界・或いはその本質的な精神の把握が變化して來ており、最初は美術又は古典文化の復活に限定せられていたが、相次ぐ世代の學者達が中世文明を拒否する一方、近代文明の本質と考へた要素を附加したのである。ブルックハルトはヨーロッパ文明史の一時期としてのルネサンスの織物を、人文主義者・新教徒・理性主義者・ロマン或いは自由主義者・理想主義者の伝統というような幾多の熱り糸の中から、選んだ糸で織つたのであるが、而も出來上つた縞模様は新たな創作であつた。彼のルネサンス解釈は一八六〇年以來の數十年間、一般の共感を得て、半世紀の間殆んど論争されず、伝統的な解釈となつたが、而も結局余りにも長期の因襲なり伝統が却つて、新説を生ずる契機となり、かくしてブルックハルト派の年代学的或いは地理的限界は修正せられるに至つたのである。兎も角も、ルネサンスの解釈に自然觀或いは中世及び近代文化の發展にとつて、決定的な問題であり、従つてルネサンス論争は恰も人間意志の自由を論ずる神學者の如く、全精力を傾けて今日に至つたのである。而も活潑な論争の主役の大部分は、ルネサンス史の或る局面の専門家達や中世主義者達であり、彼等の見解の対立は深刻なディレンマを生じている現状であるが、結局ルネサンスの問題は複數問題であつて、単に客觀的事実に関するのみ

でなく、それ等の事実の性格に就いての主観的概念に連関する問題であり、更にこれ等の諸概念は彼等自身の歴史を有するのである。

故に恐らくはルネサンスに關する現在の混沌の若干は、解決され得ると思われし、又少くとも対立する諸解釈は、過去五〇〇年間に示された諸解釈の歴史的研究に依つて、或る程度解明され得るのである。而もルネサンス解釈史を辿るには、近代歴史編纂史の解説なり、近代の主知的歴史の追求が必要であるが、これは中々の大問題である。尚又ルネサンスの諸概念は、中世史及び現代文化に対する歴史家達の解釈と緊密な關係があり、加うるに屢々美術・文芸・哲学・科学・のような特殊な文化史の方面で、それぞれ展開し來つた故に、變動する歴史編纂思潮や、各分野に於ける批判の跡を辿ることが必要になるのである云々^④と、更にルネサンス概念史論を主題に、同著の結論に於いて彼自身の立場を次のように強調詳述しているのである。即ち「ルネサンスに關する諸映像の研究なり解釈は、歴史編纂史或いは近代思想史の部類に属するもので、西洋文明の展開に極めて重要な課題であるが、各時代のルネサンス観を通じて而も、数々の先入観を知悉した上で我々自身、より明確にルネサンスを理解し得るようにしたいと思う。各時代のルネサンス解釈の足跡を辿るに連れて、歴史家の過去復元は時代と環境、又は歴史家自身の性格・関心・経験に左右せられるということ、同時に、過去に

對する歴史家の見解は絶えず先輩達の業績なり方式に、影響せられるのが常であることが理解せられるのである。従つて歴史的な諸解釈は分離せられた所業ではなく、絶えず変化發展し、而も継続的な伝統を保持、その成長に連れて謂わば親木から多くの枝葉が各方向に飛び出すのである。それ故にルネサンスを始め、その他の歴史的現象に關する如何なる解釈も、恐らくは伝統と關係なしには、十分な理解に達することは不可能である。又ルネサンスのような歴史的一時期の解釈に當つては、その歴史家が時代思潮や伝統は勿論、當代文化の一局面に格別の関心を懷くことに依つて、左右せられ得るものであり、而も亦ルネサンスに關する諸解釈は時として、例えば美学から歴史哲学に至るまで、凡ゆる分野の思想に重大な影響を及ぼして來ていることは明瞭である。而も肝要な点は過去に關する我々の概念が、客観的真理に出来るだけ近接しなければならぬこと、我々の過去観が少なくとも、意識的或いは無意識的な先入主に依る歪曲から、出來得る限り自由でなければならぬ点である。願くは過去五世紀に亘るルネサンス解釈の研究が、歴史的現実としてのルネサンス自体に關する、より正確な概念を形成する助けになり得ることを期待するものである。尚又多くの解釈が存在することが却つて、解釈の仕事を完成させる支柱になるであらうし、又諸解釈の起源と發展の探究が、他の歴史家達の見解をも、より正確に評価せし

める契機となるに相違ない。従つて若し歴史家が苟くも過去を解釈することに依つて、一つの見解を有するとしても、一面彼は客観性に、より接近することになるわけであり、その上実際は今日までにルネサンスの諸解釈が、混迷の半面では我々の理解に寄与して来ているのであつて、結局諸解釈がルネサンスを、完全な姿で観察しようとする我々の能力に、何ものかをプラスして来ているのである。元來歴史的作品の鏡は、稍もすれば単に現実の一小局面を写すであらうし、又その映像は時として歪められ曇らされるかも知れないが、而も次々に継続生起する映像が、客観的な現実の实体を写し出すことを可能にするのであつて、結局時の経過が、より包括的な綜合の機を熟させることになるのである。元來ルネサンス社会經濟史の領域での探究が特に肝要であり、而も該領域の有力なデータは相当存在しているから、ルネサンスの妥當な歴史的位置づけを試みる歴史家は、豊富な資料を選択調整或いは解釈しなければならぬ。勿論多くの歴史家達はそれぞれ専門分野の中に於いてのみ、包括的知識を把握するであらうが、若し歴史専門家が謂わば誤つた遠近画法を以つて、一断節を觀る危険を回避することが出来るとするならば、当代の性格に就いて、より広い概念を持たねばならないのであつて、概して専門諸分野の中の混迷は、全体として確かに当代に關する包括的な綜合を欠くことに依つて、助長せられてゐるのである。又逆にルネサ

ンスに關する諸解釈の不安定性は結局、一九世紀の半頃までは研究手順が屢々、或る専門分野のみに限定せられた視野の狭いデータに拠つたからである。例えばルネサンスの概念は殆んど學問・文學・芸術或いは宗教史の局面に限られており、而もこれ等の分野に於ける所謂「再生復活」の現象は、それぞれ孤立的であり、文化史大系の局面として解釈せられなかつたのである。言うまでもなく、ルネサンスを文明史の一時期として採り上げたのはブルックハルトであるが、彼の綜合は彼自身ルネサンスの特徴と考えた精神や知的局面、或いは當時の政治・經濟・社会的局面の若干を含む、広汎な、而も嚴密に統制せられた解釈であつた。而して不幸にも論拠が凡ゆる面で不十分であり、特に彼の中世文明に關する知識なり概念は、伝統的な偏見に依つて歪曲せられており、その結果として彼のルネサンスは孤立した靜的現象の観があるものである。更に彼はルネサンスは近代文明の夜明けであり、従つて一般ヨーロッパ的な現象であると解釈する一方、その精神なり思潮をイタリア人特有のものと同じ視し、その歴史的起因をイタリア獨特の事情に依るものとしてゐるのである。例の *Die Kultur der Renaissance in Italien* の刊行以來、一群の歴史家達はブルックハルトのモデルを拡充させようと腐心して來たが、その後他の多数の歴史家達が同様の熱意を以つて、これを破壊しようとする努力しており、而も伝統主義者と改訂論者の業績の

何れもが、結局はブルックハルト以上に広汎で統括的なものにはならなかつたのではあるまいかと思われるのである。というのは彼等のデータは主として、若干の特殊の研究分野から引出されており、多くの場合新しい解釈は国民的な要求や審美的タイプとか、宗教或いは世界観又はイデオロギーの問題、その他非物質的な無形の諸要素の見地からの解釈であつて、より物質的な諸要素、例えば社会・経済・政治的現象は一般にルネサンス文化解釈の要素としては、輕視せられて來たのである。尚ルネサンス文明の起源・原動力・基本的性格に関する最近の解釈の主な且つ健全な傾向は、ルネサンスと前代との著しい相違を破壊することであつたが、而も極端な場合にはルネサンスを単に中世の継続とする主題は、ルネサンスを近代の開幕であつたとするブルックハルトの信念と同様稍もすれば一方に偏した又限定せられたデータに基礎を置く解釈を生ずるに至つたのである。勿論、ルネサンスは一過渡期であつたとする妥協的解釈の中に、より多くの真理を發見するのであるが、このような解釈は結局中世と近代文明の間の根本的な相違や、過渡期それ自体に獨得のものの方を、組織的に分析することを伴わなければ無意味である。而も私は歴史家達が新たに、凡ゆる扉を開く鍵として役立つルネサンス時代精神を、發見することを試みなければならないと論ずるのではなく、私の綜合の価値に関する主張を端的に言へば、過去の出

來事は孤立的な現象ではなく、歴史は無關係な諸事実のカオスではないとの確信であつて、この確信を十分に裏付けるためには、歴史哲學の助力を必要とするのが常であらう。尚又歴史専門家が分析に捉われて、より広汎な綜合を欠くことは、結局細目の取扱上、所謂遠近画法の歪曲を招來することになり、又特殊なデータで性急すぎる綜合をなすことに依つて手続の上で、不幸な逆転を來たす恐れがあり、そのような歴史家が意識的或いは無意識的に形成した自己の時代觀念が、如何なる局面を取扱う場合にも表現せられるのであつて、結局歴史事實とは多くの歴史書に見られるように、人々の口舌に依つて、而も夥しい種類のイデオムで語るものである。實は時代に関する綜合的解釈を論ずるには、時代区分の価値を認めることが前提条件であり、この点特にアメリカでは多くの歴史家が承認している所であり、例えばコリングウッド Collingwood は論著 *The Idea of History*, 1946 の中で、「歴史に於ける時代区分の試みは、單に事實を探究するのみではなく、解釈することを恐れない進歩円熟した歴史思想の印しである。」と述べており、又事實上時代区分無しには、歴史的現実の絶えざる潮流に対する思考なり立論又は記述は不可能である。従つて歴史家がルネサンス時代に就いて、適切な解釈をするには、広く中世及び近代を附加して考えねばならないのであつて、時代概念を放棄することに依つては解決せられないのであ

る。而もルネサンス概念の混迷した現状では、時代区分を無視することも可能であろうが、それは結局絶望の勧誘に屈することであり、歴史家の職責を放棄することを意味するのである。元來伝統に裏付けられたルネサンスという名辭は、時代の意義という点で、必ずしも誤つた概念ではないにしても、例えば中世という名辭と同様に、一種の先入感なり誤解に導くものである。尚実はテイラーが、より混乱に導いた如く、一方を許容すれば他を拒否するかに見えるのであつて、結局は時代区分法に就いて、完全な意見の一致を見るまでは、ルネサンスという名辭は、その意味に就いての凡ゆる混乱があるに拘らず、他の如何なる名辭にも増して、一般的に認められる所である。更に中世主義者の最古参者である賢明なハスキンス Haskins は、その著 *The Renaissance of the Twelfth Century*, 1927 の中で、ルネサンスという名辭を適用するたゞに生ずる誤解され易い性格を指摘した後、次のように結論するのである。即ち「それにも拘らず、このような名辭はクワットロチェントやチンクエチェントというような名辭以上に、誤解せられるか否か疑問であり、又我々がどんな呼び方をするにしても、イタリヤ・ルネサンスは存在したのであつて、恰もホーマーの詩を同名の他の詩人の作に帰するようなわけにはゆかない云々」と。拘て、若し綜合への希求なり或いは又西洋文明史に於ける一時期としての、ルネサンスの存在を認める所の時代区分

の必要性を主張するならば、結局、方法論上の核心的な問題に触れることになるのである。実は綜合の仕事の第一は、例えば或る時代の文明の特徴を予め決定して、重要さの順序に体系的に調整すること、而も稍もすれば一般的な綜合に対する根拠として役立つには、余りにもその時代の一面面に注意が集中せられ勝ちであり、又当初から古典文化の復活再生としてルネサンスを描くという工合に、一つの偏見を仄めかすのである。而も勿論人々は或る見解に立たねば、歴史を解釈することは不可能であり、従つて若干の相対的な重要性の大系のもとに、歴史活動の凡ゆるカテゴリーを排列する必要を避けることは出来ないのである。で実は綜合の方法を含み且つ、分野からの根拠に對して、他の分野から引用せられた論拠の重さを計るといふような問題は、結局価値判断の問題であつて、一般に特に主観的な偏見に陥り易いのである。元來歴史家は彼自身、最も重要で興味深く感ずる事柄に對して、過去に於ける最重要事と見做す誘惑を殆んど避け得ないものであるが、特に歴史家に對し、次の問題を熟慮してもらいたいと考えるのである。即ち時代の文明に關して、どのような要素を一般的綜合のために、極めて重要と見做すかといふことの決定に先立つて、問題に對して熱心な考慮を払ふこと、又綜合に當つて彼が余り重要とは考えない要素、或いは又彼の主題とは正反對であることが判明した要素も、ネグレクトしてはならないと

いう点である。事実、諸解釈が今日まで成功を収めなかつたのは、根拠が余りにも限定せられていたからのみではなく、解釈の構造それ自体が都合の悪い事実や反対の実例を黙認する程、弾力性が無かつたからであり、このような見地からルネサンス解釈を論ずれば、何等かより以上の方法的結論を見出すかも知れないのである。元来、余りに多くを立証する歴史家は結局、何等証明しないことであり、歴史家たる者は絶対的な一致点のために望みなき探究をなすよりも寧ろ、相対的な妥当性のある特徴又は兎も角も、思慮深い比較評価を基調として綜合することで、満足しなければなるまい。而もこの優劣の評価が、ルネサンスに関しては特に重要である。というのは、過渡的な性格を有するルネサンスは、典型的な両文明の間に位置しているので、それ自身の文明は不安定な状態の中に、極めて対照的な要素で満たされていたからである。尚又各時代が前代からの夥しい思想や習慣等を、くり越すということは結局、歴史的発展の性格を有するということであり、従つて連続する時代の間の、絶対的な相違点を見出すことを期待してはならないが、而もこのような事実を認め得なかつたことが、今日まで多くの誇張と不必要な修正の、何よりの原因であつたのである。尚スコラ哲学的方法論が依然として、一五、六世紀の哲学に於ける力強い成分であつたという事実は、格別驚くに足りないことであるが、而もこのことがルネサン

スの哲学、ましてルネサンス全体が、本質的には中世的であつたといふことの証明にならないのである。元来或る時代の主な特徴は、継続する次代の少数意見として存続するものであり、特に過渡期を通じて、伝統の存続を跡づける努力の中には、特別の困難さが含まれるのである。更に、時代の綜合といふことの中に含まれる最も困難な問題は、或る時代から他の時代への継続的な歴史的発展の場合に勿論、尚各時代の内部に於ける展開に依つて提出せられる問題であつて、この場合状況に関する如何なる概説も、一定の年代学的な条件に追従しなければ、結果として生ずる綜合は静的な横断面に過ぎないから、本質的に非歴史的なものである。同じ理由で、歴史的な諸時期の間の限界線は、決して任意なものとは言ひ得ないのであつて、一文明の性格の広汎な変化は一夜の中には生じないのであるから、歴史家は平衡を保つ位置を決定するために、最善の判断力を用いなければならぬ。尚又歴史家は、例えばイタリアの文明が既に中世的でない時代でも、總体的なゲルマン文明は依然として、中世の特徴を有する事実、或いは又イタリア文化の一局面は依然として、確かに中世的であるのに、他の局面は殆んど見別けのつかぬ程、変化している事実を見出すであらう。で結局歴史家が年代的な限界線を置く点は、その歴史家が凡ゆる種類の歴史活動に割り当てる所の、相対的な重要性如何に依つて決定するのであつて、この点に恐らく

は全体としてヨーロッパ的現象を考へらるゝルネサンス文明の性格に關する核心的な問題がその中心をなす」と、謂ふは新中世主義者のは場から、縷々解説して止むべきであらう。

- ① Ferguson, *The Renaissance in Historical Thought*, 1948, p. 380
- ② *Historische Zeitschrift*, XCI : 215-82 中の論文、又はマンロー Manno 及びニローリー Sclery 共著 *Medieval Civilization*, pp. 521-46
- ③ 原著はストモンホルトの一九二九年に出た *Die Renaissance in Hammar* が仏訳。
- ④ 特ニ Sclery, *The Renaissance: its nature and origins*, 1950, pp. 7-9
- ⑤ Ferguson, *op. cit.*, p. 380
- ⑥ Siciliano, *Medio Evo e Rinascimento*, pp. 107-8 及び p. 146.
- ⑦ Ferguson, *op. cit.*, p. 130
- ⑧ Siciliano, *op. cit.*, pp. 119-20
- ⑨ Sclery, *op. cit.*, p. 10
- ⑩ Siciliano, *op. cit.*, p. 123
- ⑪ Sclery, *op. cit.*, p. 11
- ⑫ *Changing Views of the Renaissance, History, New Series*, XVI (1931-32), 214-29
- ⑬ *ibid.*, 289-97
- ⑭ Santayana, *Genetical Tradition at Bay*, p. 9
- ⑮ *Atlantic Monthly Feb.*, 1912 中の論文 *New large-scale opportunities for progress.*
- ⑯ Taylor, *Medieval Mind*, 2 vols. の Vol. I : 211 n.
- ⑰ Whitehead, *Adventures of Ideas*, p. 208
- ⑱ Dilthey, *Gesammelte Schriften*, II : 257-60

⑲ *Historisches Jahrbuch*, XLIX (1929) : 444-59. の論文 *Zum Begriff der Renaissance.*

⑳ *Histoire de la philosophie* : Vol. I, L'antiquité et le moyen âge.

㉑ Sclery, *op. cit.*, pp. 259-60

㉒ *ibid.*, p. 261

㉓ *ibid.*, pp. 262-63

㉔ *ibid.*, Pref.

㉕ *ibid.*, pp. 13-14

㉖ 周知の如く、「西洋史学Ⅻ」に故塩見高年氏の貴重な紹介がある。

㉗ Ferguson, *op. cit.*, Pref. IX-XIII.

㉘ *ibid.*, pp. 385-97

三 結 び

以上ブルックハルト及びフョイクトの伝統を追う人々及び、特に反ブルックハルト派の系統を引く所謂一群の根柢り論者中、若干の代表的な人々の見解を引用しつつ、論旨を進めたのであるが、結局フョイジンガやマルチン或いはフーガスン等の大いなる寄与にも拘らず、今日依然としてルネサンスそのものの概念混迷のため、多くのルネサンス研究家が研究方針に迷つてゐる実情であり、例えばブルックハルト派と反ブルックハルト派の止揚の課題なり両派の最大公約数の問題、或いは又ルネサンス研究がドイツからアメリカへ移行して行くプロセス、わけてもドイツに於けるルネサンス研究の不振及び、アメリカに於けるルネサンス研究の活況と、現代アメリカ人の思想との結びつきなり、知識層の在り方等、極めて興味深い重大な研究テーマであるが、微力のため、今は到底私見を発表する段階でないので、他日の機会に譲りたいと思ふ。